

ワークショップ
これまでの哲学教育、これからの哲学教育

渡邊浩一（大阪経済法科大学）

宗像恵（京都産業大学）

浜渦辰二（大阪大学）

司会 田中一孝（桜美林大学）

本ワークショップの目的は、我が国の高等教育機関における哲学教育について振り返り、これからの哲学教育について展望を得ることである。

我が国における高等教育政策は、グローバル化や産業社会構造の変化に対応できる「21世紀的市民」を育成するための教育を各高等教育機関に要請している（「学士課程教育の構築に向けて（答申）」（2008））。また、そうした教育の質を保証するという観点から、大学は様々な制度改革を実行することや、「アクティブラーニング」や「反転授業」などの用語に顕著なように、具体的な教育の実践方法の転換までもが求められている（「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」（2012））。こうした教育政策の流れは、個々の高等教育機関という単位だけでなく、各学問分野にまで及んでいる。すなわち、各学問分野は自らの再定義をするとともに、その教育の意義を社会に対して明らし、成果を実現するための教育モデルを提示することが求められ（「分野別質保証のあり方について」（2010））、そうした要請を受け他の分野同様哲学分野でも「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準」（2016）がまとめられたことは記憶にあたらしい。

本ワークショップでは、以上のような高等教育の動向を背景に、今後の哲学教育のあるべき姿やそれを社会に対して説得的に伝えるための方策を会場の参加者を交えて考察したい。議論の出発点として、各登壇者は以下のことについて発表・報告をする。

まずはそれぞれの大学においてどのような哲学教育が行われ、また教育についてどのような議論が行われてきたのか、認識を共有する。哲学教育に関わる書誌を網羅的に調査した成果について報告する。

高等教育政策の動向を踏まえ哲学教育をどのように考えるべきかについて、これまでも重要な議論は重ねられてきた。そのうちの一つに、日本哲学会の哲学教育ワーキンググループによる一連のワークショップが挙げられる。そこではどのような展望が得られ、それを踏まえて哲学分野の教員はどのように教育を行ってきたのか。ワークショップの当事者が報告する。

大阪大学は我が国の哲学分野においては早い段階から、ワークショップ形式の授業や、サービスマーケティング、フィールド調査などの教育手法を取り入れてきた。こうした実践や教育カリキュラムについて報告するとともに、社会に出る学生にどのような哲学教育が求

められるかを考えたい。

最後に、哲学教育の意義を量的データにもとづいて実証する方法を提案する。大学教育は学修目標を明らかにしその成果をエビデンスとともに提示する必要があると言われていたが、従来、こうした発想は哲学分野に限らず多くの大学教員が抵抗を感じてきた。そこで、データを収集する意味や収集方法を丁寧に吟味しながら、社会に哲学教育の意義を伝える方法を考えたい。

ワークショップ
一元論の多様な展開
—— 一元論に関する現代の議論を受けて ——

雪本泰司（大阪大学）

太田匡洋（京都大学）

立花達也（大阪大学）

司会 小山虎（大阪大学）

このワークショップは、一元論に関する現代の議論を受けつつ、その射程をより広げることで、哲学の歴史のなかで見出されてきた（あるいは後付けでそう呼ばれてきた）様々な一元論的な主張について検討し、将来の一元論について考える場としたい。雪本が現代の一元論が提示する基本的な枠組みについて紹介する。それに対して太田と立花が、それぞれの哲学的な文脈から応答し、現代一元論の拠って立つ前提を批判的に検討する。

以下、前提となる議論を簡潔に述べる。分析哲学は新ヘーゲル主義的一元論への抵抗をともなって生まれた。この出自ゆえ、分析哲学においては具体的対象の数についての一元論は長きにわたり不可能な立場と見なされてきた。この状況を打開したのがシャフアーによる論文、“*Monism: The Priority of The Whole*”である。そのなかで彼は、存在が複数ある（存在多元的である）ことを認めつつも、他のものがすべて部分としてそれに依存するところの全体、すなわち宇宙だけが唯一の基礎的な存在者であると主張する立場：優先性一元論（*priority monism*）を提唱した。これ以来、一元論は現代形而上学の一つのトピックとして注目されるようになった。ところで、この論文のなかで優先性一元論者として度々名指されている哲学者のなかにヘーゲル、そしてスピノザがいる。ヘーゲルに関しては、シャフアーは彼に一元論的な着想を見出すけれども、それは必ずしも実態を反映していない。じつは「一元論」という概念を歴史に求めるとき、そこには大きな捻れが認められるのである。スピノザに関しては2012年に論集 *Spinoza on Monism* が出版され、多くの分析形而上学者と哲学史研究者が集ったものの、彼らの対話が成功しているとは言い難いという現状がある。

雪本は、シャフアーによって形式化された優先性一元論と存在一元論（*existence monism*）という基本的な区分を解説した上で、さらにそれに対する批判的な立場について論じる。太田は、「一元論」の概念史を通じて、この思想を哲学史のなかで理解する糸口を与えるとともに、現代形而上学者が前提としてもっているであろうヘーゲル的一元論概念の理解を批判的に検討する。立花は、シャフアーによる一元論の枠組みがスピノザの哲学を取り逃がしてしまうことを示し、より包括的な一元論の枠組みの可能性を探る。